

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.180

2008年5月

平成20年度入学式を挙行



## 目次

### ●ニュース

平成20年度入学式を挙行	3
インドの著名な科学者 C. N. R. ラオ教授が本学を訪問	10
山本理事がブルネイ・ダルサラーム大学等を訪問	11
ロベルト・フーバー博士に「名古屋大学名誉博士」の称号を授与	11
平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰者が決まる	12
ブラザー工業株式会社と産学連携協定を締結	12
産業技術総合研究所との技術交流会を開催	13
退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催	14
平成20年度春季全学留学生オリエンテーションを実施	14
三省堂書店学習図書援助制度による図書贈呈式が挙行される	14

### ●学生の元気

学生による学生のための「学生之新聞」	15
岡本 美紀（情報文化学部社会システム情報学科2年）	

### ●知の先端

緑藻の生物時計遺伝子から植物時計の進化を探る	16
石浦 正寛（遺伝子実験施設教授）	

### ●キャンパスクローズアップ

豊田講堂（最終回）	18
-----------	----

### ●部局ニュース

日中国際シンポジウム「WTO 体制下の日中通商政策 ーラウンド交渉・紛争解決・法整備」を開催	20
シンポジウム「産学連携、大学間連携による人材育成の充実」を開催	20
農学国際教育協力研究センター第11回オープンセミナーを開催	21

### ●資料

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成20年3月16日～4月15日	25
---------------------------------	----

### ●INFORMATION

第49回名大祭を6月5日(木)～8日(日)に開催	29
--------------------------	----

### ●イベントカレンダー

●ちょっと名大史	30
----------	----

名古屋帝国大学の文学部設置構想	32
-----------------	----

# 平成20年度入学式を挙行





平成20年度名古屋大学入学式が、4月5日(土)、豊田講堂において、大学院は午前10時から、学部は午前11時15分から挙行されました。

本年度の入学生は、大学院2,283名(修士課程及び博士課程前期課程1,638名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)83名、医学博士課程及び博士課程後期課程562名)及び学部2,228名の計4,511名です。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、平野総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、辞が述べられました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。続いて、各研

究科長等の紹介があった後、大学院教育発達科学研究科博士課程前期課程入学生の小西 麻由さんと経済学部入学生の中山 雄太さんが、入学生総代として、入学にあたって学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

また、来賓として、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長)から、先輩として心のこもった祝辞をいただきました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

引き続き、名古屋大学混声合唱団が、歓迎の歌を合唱し、名古屋大学交響楽団による「威風堂々」(エルガー作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

式典の後、学部入学生を対象として「生協ガイダンス」及び学生によるサークル紹介「入学祭典」が行われました。様々なサークルによる趣向を凝らしたステージパフォーマンスに、会場は大いに盛り上がりました。

終了後は、豊田講堂の前庭に詰めかけた大勢の学生に部活やサークルの勧誘を受けたり、保護者などと晴れやかな表情で記念撮影をしたりする入学生の姿が見られました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ([http://www.nagoya-u.ac.jp/broad/h20\\_ent.html](http://www.nagoya-u.ac.jp/broad/h20_ent.html))で視聴することができます。



# 平成20年度大学院入学式祝辞

名古屋大学総長 平野 眞一



名古屋大学大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎します。

名古屋大学大学院は、本日ここに、修士課程及び博士課程前期課程1,638名、専門職学位課程83名、医学博士課程及び博士課程後期課程562名、合計2,283名の入学生を迎えました。将来を担う皆さんを、トヨタ自動車株式会社及び関連会社のご寄附によって48年ぶりに改装された名古屋大学のシンボルであるここ豊田講堂においてお迎えできることは、私どもにとって大きな喜びであります。

皆さんは、すでに4年あるいは6年以上にわたる学生生活を終えた後の入学であり、大学生活のあり方を理解した上で、更なる向学心による進学であります。

名古屋大学は、皆さんの高い志を大切に教育・研究の環境を提供します。本学は「大学院重点大学」として、教育・研究の環境整備に努めてきましたが、入学生数においても学部入学生数2,228名を上回る大学院入学生を迎えております。

名古屋大学は、前身としての仮医学校が設立されてからは137年の歴史がありますが、総合大学としての創立以来69年の比較的短い歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を産み出し、社会に貢献する人材を育ててきました。そのような輝かしい成果を挙げてきたのは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な学風のもとに、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えており、今後ともこれまでの伝統は大切にしていきます。

名古屋大学は、人間性と科学の調和的発展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知の創生と、科学的・歴史的知的財産を踏まえて新たな分野、課題に果敢に挑戦し、自らの社会的責任を自覚して国内外の正義の実現に向けて行動する「勇気ある知識人」を育成して

いきます。本学は、優れた人材の育成、学問の発展、創造的な科学技術の創成、安心・安全な先進医療などにおいて社会に貢献できる我が国有数の大学院重点基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学であります。

知の継承と次世代への文化の発展を支えるためには、異分野間での強い連携と協力関係の強化が必要であります。言うまでもなく、学術・文化は「人」が創造するものであり、「学」はまさに「HUMANITY」そのものであります。「学」の発展のためには、文系・理系の力強い連携が必須であり、総合大学としての名古屋大学は、その特長を生かして「人」を基軸とした活動をします。

「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想を持つことができる若者の育成が不可欠であります。これから社会のあるべき姿の一つは、年齢・性別などにとらわれず、多様な人材が尊ばれる、責任感を持った人が目立ってよい環境を整えることであろうと思っています。それが実現されてこそ、国内に留まらず海外に活きた情報が発信でき、真の国際化が実現されるのだと確信します。名古屋大学は、そのような人材育成に努めます。

大学院に入学された皆さんには、総合大学に学ぶ学生として、豊かな人間性を持つ国内外での指導的役割を担うリーダーとしての素養を身につけてもらいたいと思います。文系、社会系を専攻する方はもう一度理系の基礎を学び、理系を専攻する方は文系、社会系の基礎を身につけて社会の仕組みを学んでいただきたい。皆さん、自分の分野の専門的な学問のみに留まることなく、好奇心を持って他の分野の基礎素養を身につけるように努めてください。

皆さんは、学部生として学生生活を経験した上で、志を持っての進学ですので、「何のために、何を求めて名古屋大学大学院に入学したか」と尋ねる必要はないと思います。しかし、時に、「自分のある姿を見つけていない」方に接します。「自分は何を通して、この世に生を受けた証とするか」、自分に問いかけてください。自分探しは大切

であります。間違えて逃避をしないでください。あなた方、一人ひとりがかげがえのない大切な人です。「夢と希望」に向かって果敢にチャレンジしていただきたい。

大学院は学部の単なる延長ではありません。「自分で積極的に考え、答えを出し、行動する」自律的な習慣を身に付けましょう。と同時に、日本で、世界で起きていることに批判的な目を向けてください。そして、建設的な態度で問題の解決に向けて一緒に活動しましょう。社会は、あなた方の生活の基盤であり、将来の自分を置くところなのです。そのためにも自分の「IDENTITY」を確立してください。

大学院では特に、解答が予め分かっていない、世界で誰もやっていない研究を行います。成果が出ず真剣に悩むこともあると思います。その苦悩が厳しければ厳しいほど、課題を解決し、あるいは新しいことを発見した時の喜びは大きいものです。課題を見つけ、情熱を持って果敢にチャレンジしてください。研究は、往々にして計画を立てたとしても予測どおりには進まず、頂上が見えない山に登るようなものです。登ったと思うと、また次のより高い山が現れます。とはいえ、「知」を求める旅は厳しいけれども、また楽しいものです。私も、修士課程の1年の時に成果が出ず、自信をなくして、悩みこみました。しかし、自分の姿を失いかげながら、もう一度チャレンジする気持ちを戻して、物事を前向きに考えようと努めました。そうすると、面白いもので、成果も出るようになり、その成果に涙を流して喜んだことが、昨日のここのように思い起こされます。今の私の原点はそこにあります。

20世紀は、欧米に追いつき、追い越すために大きな努力が払われてきた時代であり、物質文明を飛躍的に発展させてきました。しかし、一方では、人間とのインターフェイスが弱かったために、人類全体に関わる幾多の問題が残されていることも事実であります。今は、「人」を基軸においた、心の豊かさを大切にしたい安心・安全な持続可能な社

会を構築するために、叡智を結集し行動する時期であります。国、大学、産業界は大きな転換期にありますが、目的と動機を失わず、勤勉・誠実に新しい時代を創り上げるために努力すれば、活力ある社会に再生することは可能であると確信しております。皆さんも、新しい社会の創生に向けて、我々とともに真摯に取り組んで下さい。皆さんは、今後の世界をリードすることが期待されている方々なのです。今や、私どもはグローバリゼーションの中で国際的に存在を示さなければなりません。そのために、世界に通じる人間性と基礎学力に加えて総合力を身に付けていただきたい。

皆さん、キャンパス内では非常に多くの留学生に会っていきましょう。名古屋大学には、70を超える国と地域から1,200人以上の留学生が学んでおり、その数は全国の国立大学でトップクラスであります。キャンパスはまさに素晴らしい国際交流の場でもあります。積極的に留学生と交流し、お互いの言語や文化、歴史を学びあい、理解しあってください。留学生の皆さんは、日本の文化はもとより他の国の文化を学び、交流の輪を広げてください。グローバル化においては、人間関係は何にも勝るものであります。国際交流のためのツールでもあるコミュニケーション能力を身に付けて、国際的に活躍する基盤を築いてください。

終わりにもう一度皆さんにお伝えします。今後、受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識を持って積極的に取り組んでこそ、真理を探究する、知を創生する楽しみが生まれます。将来を担う皆さんに期待しています。新しい時代を創り出す「高い志」を持ち続けてください。

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上で、大学院入学生への辞とします。

# 平成20年度学部入学式祝辞

名古屋大学総長 平野 眞一



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

名古屋大学は、本日ここに2,228名の学部入学生を迎えました。将来を担う皆さんを、トヨタ自動車及び関連会社のご寄附によって48年ぶりに改装された名古屋大学のシンボルであるここ豊田講堂においてお迎えできることは、私どもの大きな喜びであり、大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎いたします。

皆さんは、澁刺とした気分で、高い志を持ち、また胸躍らせてこのときを迎えられたでしょう。ぜひ、この気持ちを大切にしてください。大学も、皆様のこの気持ちを大切にしたい教育・研究環境を提供します。

名古屋大学は、前身である仮医学校から始まって137年、名古屋帝国大学として1939年の開学以来69年ほどの歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を生み出し、社会に貢献する人材を育ててきました。そのような輝かしい成果を挙げてきたのは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な学風のもとに、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えております。

名古屋大学は、人間性と科学の調和的発展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学とともに視野に入れた高度な研究と教育を実践し、将来を担う人材の育成と優れた研究の創造を行い、社会に貢献するという基本理念のもとに、既存概念にとらわれず、科学的・歴史的な知的財産を踏まえて、新たな分野、課題に果敢に挑戦すること、また自らの社会的な責任と役割を自覚して社会的弱者への思いやりを持ち、国内及び国際社会における正義の実現に向けて行動する豊かな人間性を持った「勇気ある知識人」を育てる教育・研究の充実に努めております。名古屋大学は、優れた人材の輩出、学問の発展、先導的な科学技術の創出、安心・安全な高度医療などにおいて社会に貢献できる我が国固有数の基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学であります。

皆さんが社会で活躍するための専門教育については、「研究重点大学」としての実績ある教育システムを準備しておりますが、同時に21世紀をリードする人材の育成には「教養教育」は欠かせません。本学では、全学の教員が担当する「教養教育院」を設置し、教養教育を中核とする「全学教育」を行い、“研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知的成果の創成と豊かな人間性を持つ知識人”の育成に努めております。

皆さんは、今後、このような教育・研究環境のなかで学んでいくこととなりますが、何かを漫然と待つのではなく、自ら問題意識をもって積極的に勉学してこそ、知の探求、真理を探究する楽しみが生まれます。受け身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。新しい時代を創り出す高い「志」をもって積極的に学んでください。

21世紀は「知」の時代です。「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想を持つことができる若手の育成が不可欠であります。これからは、年齢・性別などにとらわれず、多様な人材が尊ばれる、若手が目立ってよい環境を整えることが必要であると思っています。名古屋大学は、そのような環境の実現に向けて活動し、国内に留まらず国際的にも活躍する総合力をもつ若者を育てます。

一方、我が国が抱える構造的な財政赤字の問題と相俟って、政治・経済の混迷、急速な少子化及び高齢化社会の到来など社会基盤の根幹に関わる問題、生活基盤の二極化問題、そして無惨な事件に見られる不条理な問題など、ことさら終末感を思わせるような問題が多くあることも確かです。これらの現実に触れるたび、かつてないほどの不確実性や閉塞感に戸惑いを感じている人は多いと思います。このような社会環境下で育った皆さんは、程度の差はあれ、多くは内面に存在感についての疑念を抱えながら大学に入学してこられたかもしれません。とはいえ、今は自分の意識と努力次第で自分の好きな道に進める時代であります。

皆さん、ここで、「生を受けて学ぶことが出来る今ある自分の環境に感謝」とするとともに、今一度胸に手をあてて自問してみてください。「何を求めて、何をしたいか名古屋大学に入ってきたか」と。

大学は、人間性を高め、学問を身につける場であることは間違いありませんが、同時に「自分がどう生きたいか」を問い続け、「自分が最善をつくすものは何か」を早く見出し、その夢を実現するよう努力していくところであります。人生においては、日頃から貴方がどんな種子を蒔いたかが重要です。自分の人生という畑に責任をもって、種子を蒔きましょう。自分で自分に「肥やし、いわゆる投資」をし、種を育てましょう。大学も皆さんを応援します。

私は機会あるたびに「夢を持とう。夢の実現に向かって進もう」と呼びかけています。学生が主体となって運営する本年の「名大祭」のテーマは、「夢滴」であります。この趣旨は「夢は実現に至らないはかないものかもしれない。しかし、ほんの少し、一滴でも叶えられたのなら、皆の合力は無限になる。」との意味を含んでいると伺っています。当然ですが、大学への入学は目標ではありません。「夢と希望」を叶える過程の一里塚です。どういう過程を経て最終目標に到達するのか、その道筋を立てましょう。「夢と希望」は人生を活力に満ちたものにします。「夢と希望」を持ち、目標の達成に向けて地道な努力を続ければ、皆さんが進む道は大きく開けます。

講義では、これまでに人間が人文と社会と自然の諸現象を観察し、理論化し、体系づけてきた学問体系の形成過程を教え、専門的な知識に裏付けられた批判的な思考力と構成力を養うようにしていきます。いまだ分かっていないことがどれだけ多くあるかを知ることになるでしょう。これは皆さんの好奇心を刺激し、学習意欲を掻き立てることになるでしょう。

加えて、現在、世界で、日本で何が起きているかに、鋭い目を向けてください。我が国の将来を担うのは皆さんです。希望の持てる社会にしなければなりませんし、国際的にも責任ある国にしなければなりません。名古屋大学には、70を超える国と地域から、1,200人以上の留学生が学んでおり、その数は国立大学ではトップクラスであります。キャンパス内では、接する留学生から、その国の言語はもとより、歴史、文化や宗教などを学べるチャンスが一杯です。キャンパスは、まさに素晴らしい国際交流の場であり、小さな地球であります。

グローバル社会においては、人間関係はどんなものより大切であります。留学生には、名古屋大学に留学して満足してもらえ環境を整えたいし、日本人学生には国際的に活躍できる基礎を築いてもらいたい、と思います。在学中に、異なる国の方々の文化、歴史や宗教を尊重し、真摯に議論できるコミュニケーション能力を身に付けてください。

学生生活のもう一つの重要な活動は、多くの教員と交流し、人生の機微を学ぶとともに、互いに心から信頼しあえる真の友人を作ることです。また、大学は、ただ単に知識の吸収の場であるばかりでなく、全人教育の場でもあります。全人教育にあつては、課外活動である部活動が果たす役割は大きいものです。

最近では、ややもすると人間関係が希薄であるといわれておりますが、部活動では、同僚間、又卒業生の会等を介して広い世代の人間との交わりがあり、今後の人生において大切な財産になります。

名古屋大学は、運動関係の部活動が活発な文武両道に通じる人間教育を目指している大学のひとつであり、新聞でもよく取り上げられているように、多くの競技大会でも活躍しております。「学習」する意欲を失わず、同時に部活動などを通じて実りある大学生活を送り、総合大学の学生として良い人間関係を築き、心身を磨き、学問的にも人間的にも大きく成長されることを期待しています。

貴方たちはダイヤモンドの原石のように潜在力があります。自分を磨けばより輝き光り、人をひきつけます。大学はその環境を用意しますが、自分でも研鑽して欲しいと、希望します。

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上をもって、入学生への辞といたします。



## 来賓祝辞

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長  
トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長



## 平成20年度大学院入学式

ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田でございます。

皆さん、名古屋大学大学院ご入学たいへんおめでとうございます。名古屋大学全学同窓会を代表して一言お祝いを申し上げます。

さて、本日皆さんがお集まりいただいております、この「豊田講堂」は、当時の勝沼総長のご依頼を受け、私どもトヨタ自動車の寄付により、1960年5月に建てられました。設計者は、当時、新進気鋭の建築家で、ワシントン大学助教授であった楨文彦先生であります。また、「豊田講堂」という名前は、「発明王豊田佐吉翁を記念する」意味をこめて、大学の評議会で決めていただきました。建設中には、中部地方に甚大な被害をもたらした伊勢湾台風(1959年9月)の影響で、工事が1ヶ月以上も遅れてしまったこともございました。

本年2月に、音響効果や座席などを始めとした講堂の保全改修・増築工事が無事終わり、この豊田講堂で二年振りに入學式が挙行されることになり、講堂の落成当時を思い出し、私も、大変懐かしく思っている次第でございます。

さて、みなさんは、本日から、大学院生として、研究のプロとしての道を歩まれることになりました。ご承知のとおり、名古屋大学は、現在、グローバル化の進展する中で、「大学の国際競争力の向上」「日本を支える社会に開かれた大学」「高い志と情熱をもった人材の育成」などを目指し、あらゆる各分野で、平野総長を先頭に、大学改革を積極的に進めていただいております。このような中で、皆さんには、是非、骨太の研究者を目指していただきたいと思っております。

私の祖父・豊田佐吉の残した言葉に、「障子を開けてみよ。外は広いぞ」という言葉がございます。この言葉のように、皆さんには、専門分野を深く研究するだけでなく、幅広く、また、グローバルな視点からも情報の収集に

努め、判断力や分析力の土台のしっかりした、いわば、T(ティー)字型の骨太の研究者になっていただきたいと思っております。

例えば、自然科学の研究分野で申し上げますと、ご承知のように物理や化学、生物学、医学など、さまざまな分野が融合した新しい研究が進み、その成果がどんどん出てきております。私どもの自動車でも、脳科学や生命科学と融合した研究を進めております。

このような研究の潮流にも、しっかりと目線を置くとともに、さらに、経済や経営、あるいは、芸術・文化、哲学、国際情勢などについても、幅広く知識を吸収して、見識を高める。あるいは、自分のコアとなる研究をベースに、内外の大学、研究所、企業などに友人や幅広い交流ネットワークを沢山持ち、時には議論の火花を散らして研鑽を積む努力が大切であると思っております。そのような取り組みの中から、他大学や研究機関、そして企業との連携強化がはかれてくると思っております。

また、何よりも、研究においては、失敗を恐れず、汗をかきながら、愚直に研究をやり抜くということが大切だと思います。

私も、学生時代に研究のご指導を頂いた恩師に、「君たちは決して天才にならなくても良い。ひとつのことをこつこつと探求し、専門の教科書に一行でもいいから自分のやったことを新しく付け加えるような研究をやりなさい」と言われました。私は、これを私の信条として、自動車産業の半ページを書き上げるべく取り組み、今日に至っております。皆さんには、それぞれの研究分野で、愚直に、汗をかきながら、真摯に取り組んでいただき、新しい道を切り拓いていただくことを期待しております。そして、それが名古屋大学の国際競争力を高め、世界に開かれた魅力ある大学の創造に繋がっていくと思っております。

さて、皆さんは、名古屋大学を卒業された方は、既に名古屋大学全学同窓会の会員であり、他大学から来られた方



は、今日から準会員となります。

名古屋大学の各学部の同窓会は古くからありましたが、全学同窓会は、それらと大学の協力を得て、全国の大学に先駆け、平成14年10月に創設され、会長を私がお引き受けいたしました。全学同窓会は、内外に支部を持っているのが特徴でございます。現在までに、国内には、関東支部、関西支部および浜松を中心とした遠州会が設立されております。また、海外では、韓国、ベトナム、バングラデシュ、タイ、上海、北京の6つの支部が設立され、今年は台北とカンボジアに支部を設立する予定でありまして、今後名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点として、これらの同窓会支部を活用していただければと思っております。

名古屋大学が、中部地区の基幹総合大学として、研究、教育、社会貢献の各方面で世界屈指の大学となるように皆様と一緒に活動していきたいと希望いたしております。よろしく願いいたします。

本日は本当におめでとうございました。

## 平成20年度学部入学式挨拶

ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田でございます。名古屋大学全学同窓会を代表して一言お祝いを申し上げます。

皆さんは、めでたく名古屋大学ご入学されました。まずは、心からお祝い申し上げたいと思います。

さて、本日皆さんがお集まりいただいております、この「豊田講堂」は、当時の勝沼総長のご依頼を受け、私どもトヨタ自動車の寄付により、1960年5月に建てられました。設計者は、当時、新進気鋭の建築家で、ワシントン大学助教授であった楨文彦先生であります。また、「豊田講堂」という名前は、「発明王豊田佐吉翁を記念する」意味をこめて、大学の評議会で決めていただきました。建設中には、中部地方に甚大な被害をもたらした伊勢湾台風(1959年9月)の影響で、工事が1ヶ月以上も遅れてしまったこともございました。

本年2月に、音響効果や座席などを始めとした講堂の保全改修・増築工事が無事終わり、この豊田講堂で二年振りに入学式が挙行されることになり、講堂の落成当時を思い出し、私も、大変懐かしく思っている次第でございます。さて、本日、皆さん、大変フレッシュな気持ちで、この場に集まっておられると思います。私も、皆さんの若さや緊

張、それから、気概を感じまして、非常にさわやかな気持ちが致しております。これから新たに大学生活に入られる皆さんは、大きな夢や期待をむねに、新しいことにどんどんチャレンジしていこうと思っておられることでしょう。

名古屋大学には、総合大学として、自然科学から社会科学、人文科学まで、いずれも全国トップレベルの教授陣を擁し、充実した魅力ある講座がそろっております。さらに、創立以来、独創性豊かで、自由闊達、清新な学風は、良き伝統として、今日まで脈々と受け継がれてきております。

そして、現在、グローバル化の進展する中で、「大学の国際競争力の向上」「日本を支える社会に開かれた大学」、「高い志と情熱をもった人材の育成」などを目指し、あらゆる分野で、平野総長を先頭に、大学改革を積極的に進めていただいております。

「障子を開けてみよ。外は広いぞ」という私の祖父・豊田佐吉の言葉が、私は大好きです。

皆さんには、名古屋大学の恵まれた教育環境を自分のものとして生かし、視野を広くもって、現状に安住することなく、もっと欲を持って、高い目標を掲げて行動し、知力、体力、気力の充実を図っていただきたいと思っております。そして、将来のリーダーとして求められる「志やこころ」というものをしっかりと学んでいただきたいと思っております。

さて、皆さんは、今日から名古屋大学全学同窓会の準会員となります。

名古屋大学の各学部の同窓会は古くからありましたが、全学同窓会は、それらと大学の協力を得て、全国の大学に先駆け、平成14年10月に創設され、会長を私がお引き受けいたしました。全学同窓会は、内外に支部を持っているのが特徴です。現在までに、国内には、関東支部、関西支部および浜松を中心とした遠州会が設立されております。また、海外では、韓国、ベトナム、バングラデシュ、タイ、上海、北京の6つの支部が設立され、今年は台北とカンボジアに支部を設立する予定でありまして、今後名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点として、これらの同窓会支部を活用していただければと思っております。

名古屋大学が、中部地区の基幹総合大学として、研究、教育、社会貢献の各方面で世界屈指の大学となるように皆様と一緒に活動していきたいと希望いたしております。よろしく願いいたします。

本日は本当におめでとうございました。

## インドの著名な科学者 C. N. R. ラオ教授が本学を訪問



ラオ教授と会談する平野総長

インドの C. N. R. ラオ (Chintamani Nagesa Ramachandra Rao) 教授が、3月17日(月)から20日(木)、本学を訪問しました。ラオ教授は、物性物理、物性化学、ナノサイエンス、無機化学が専門で、本学が昨年10月に大学間学術交流協定を締結したインド科学大学院大学の学長やジャワハルラール・ネルー高等科学研究所長を歴任し、海外の12大学及びインド国内の34大学の名誉博士、世界の25カ国の学士院会員でもあるインド科学界の最重要人物の一人です。

ラオ教授は、今回、本学とインドとの学術研究交流を促進するために、本学のグローバル COE プログラム「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」主催の「先端的ナノマテリアルに関するインド・名古屋大学ワークショップ」に特別講演者として参加しました。18日に開催された同ワークショップには、本学の研究者及び大学院生を中心に約80名が出席し、ゲスト講演者として板東義雄物質・材料研究機構フェローが、また、本学からは渡辺芳人物資科学国際研究センター教授、前田雄一郎理学研究科教授、篠原久典理学研究科教授、八島栄次工学研究科教授、田中信夫エコトピア科学研究所教授（発表順）が研究発表

を行い、参加者は熱心に聴講するとともに活発な質疑応答を行いました。

翌19日、ラオ教授は、平野総長及び大峯理事の案内で学内視察を行い、野依記念物質科学研究所、赤崎記念研究所、篠原教授及び田中教授の実験室等を見学し、本学が誇る最先端研究に大きな関心を寄せていました。また、総長との会談で、ラオ教授よりインド科学大学院大学及びジャワハルラール・ネルー高等科学研究所を始めとするインドを代表する高等教育機関や研究機関と共同シンポジウムを開催するなど本学との交流を推進したい旨の提案があり、総長からも、多忙な中での本学来訪について深く感謝するとともに、インドとの更なる学術研究交流を促進するため、本年6月に大峯理事を筆頭とする本学代表団をインドに派遣し、主要なパートナー機関との関係を強化したい旨の表明がありました。



特別講演を行うラオ教授



ワークショップ会場の様子

## 山本理事がブルネイ・ダルサラーム大学等を訪問

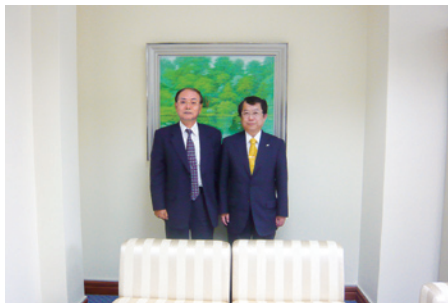
山本理事は、3月19日(水)、20日(木)の両日、ブルネイを訪問し、これまで学術交流の少なかったブルネイの大学等との交流の促進を図りました。

19日にブルネイの首都バンドルシリブガワンに到着した山本理事は、在ブルネイ日本国大使館を訪問し河野雅之公使参事官を表敬訪問しました。懇談の中で、河野公使参事官よりブルネイの教育事情や、日本の大学と同国の大学との交流状況の説明がありました。

同日午後には、ブルネイ・ダルサラーム大学を訪問しました。同大は、学生数約3,600人で8学部を有するブルネ

イ唯一の総合大学です。タン理学部理工学科長、シャミム人文社会科学部経済学科長、ダティン国際課長等との懇談では、両大学の概要説明に続き、山本理事より、本学のアジア重視の戦略の中で、これまで交流実績のない同大と今後交流を深めていきたい希望が伝えられました。その後、農学分野で、東南アジア諸国の大学と進めている早期再生林研究協力ネットワークへの同大の参加や、工学のエネルギー分野での研究協力など具体的な交流分野について活発な意見交換が行われました。

翌20日には、同大のキャンパスを視察しました。400ヘクタールのキャンパス内には、モスクや大講堂が整備されており、キャンパスの近くに新しい学生用宿舎を建設中であることなどから、同国の教育を重視する姿勢が感じられました。また、視察日は祝日であったにもかかわらず、熱心に勉強する学生の姿をみることができました。



山本理事（右）と河野公使参事官



ブルネイ・ダルサラーム大学での懇談の様子

## ロベルト・フーバー博士に「名古屋大学名誉博士」の称号を授与

ロベルト・フーバー博士（ドイツ・マックスプランク生物学研究所名誉所長）に対する名誉博士号の称号授与式が、3月11日(火)、野依記念物質科学研究館において、平野総長、大峯理事、近藤理学研究科長、異物質科学研究センター長をはじめ、約120名の出席のもと、挙行されました。

フーバー博士は、構造生物学の第一人者で、生体内で重要な機能を担っている数多くのタンパク質の結晶構造を解明し、それらが持つ生物学的意義を明らかにしてきました。とくに、1980年から1985年にかけて、紅色光合成細菌のもつ膜タンパク複合体の三次元構造解析に成功し、光合

成機構の解明に革命的な進展をもたらした業績が高く評価され、1988年にノーベル化学賞を受賞しました。

同博士の本学への招へいは、学術創成研究「還元系金属酵素の有機金属・クラスター化学」の国際シンポジウムでの基調講演を目的に実現したもので、この機会にあたって、博士の偉大な業績と本学における顕著な教育、学術上の貢献に対して、名古屋大学名誉博士称号を授与する運びとなったものです。

羽織袴で授与式に臨んだフーバー博士は、総長から名誉博士記を授与され、続いて記念品贈呈を受け、さらに、異物質科学国際研究センター長からも記念品贈呈を受けました。続いて総長の式辞、フーバー博士の答辞、記念の琴演奏があり、その後、「Life on Carbon Monoxide」と題した基調講演が行われました。講演では、総長を始め会場にいたすべての聴衆が、博士の熱のこもった講演に魅了された時を過ごしました。



平野総長から名誉博士記を授与されるフーバー博士



記念撮影

## 平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰者が決まる

平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定し、本学から6名が受賞しました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めたものについて、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としており、「科学技術特別賞」、「科学技術賞（開発部門、研究部門、科学技術振興部門、技術部門、理解増進部門）」、「若手科学者賞」、「創意工夫功労者賞」、「創意工夫育成功労学校賞」の各賞に分かれています。

受賞者は以下のとおりです。

### ■科学技術賞（研究部門）

受賞者：河本 邦仁 工学研究科教授

業績名：生物に学ぶセラミックス低温合成法の研究

受賞者：坂田 誠 名誉教授

業績名：情報理論に基づく電子密度及び核密度分布の可視化方法の研究

### ■若手科学者賞

受賞者：上野 隆史 理学研究科助教

業績名：蛋白質超分子を用いたナノ材料開発の研究

受賞者：岸田 英夫 工学研究科准教授

業績名：低次元強相関絶縁体における非線形光学応答の研究

受賞者：成田 哲博 理学研究科助教

業績名：電子顕微鏡によるアクチンフィラメント端複合体構造の研究

受賞者：藤野 修 多元数理科学研究科准教授

業績名：高次元代数多様体の双有理幾何学の研究

## ブラザー工業株式会社と産学連携協定を締結

3月26日(水)、赤崎記念研究館2階産学官連携推進本部において、ブラザー工業株式会社との間で、共同研究および情報交換、人材交流活動の連携を目的とした産学連携協定を締結しました。

調印式では、両機関の関係職員列席のもと、宮田副総長と石川茂樹ブラザー工業株式会社取締役常務執行役員が協

定書への調印を行いました。

本学と同社は、これまで人的交流や共同研究を実施してきましたが、本協定の締結を契機に、個別テーマにとどまらず、さらに広範なテーマでの研究者の交流を目指します。具体的には、ナノ技術領域、環境技術領域無機、有機デバイス技術領域、生産技術領域などを対象に同社が研究テーマを提案し、本学では随時技術交流会を開催することも計画しています。

今後、本学とブラザー工業株式会社は、お互いの特色を活かしながら連携を推進し、国際水準の研究・技術開発を目指していきます。



協定書締結後、握手をかわす宮田副総長(右)と石川取締役常務執行役員(左)

## 産業技術総合研究所との技術交流会を開催

独立行政法人産業技術総合研究所（産総研）との連携・協力協定に基づく技術交流会が、3月12日（水）、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー3階ベンチャーホールにおいて開催されました。

産総研との連携・協力協定は、研究開発、人材育成等について連携することにより、我が国の学術及び産業技術の



会場の様子

振興に寄与することを目的として昨年締結されたもので、本学側はエコトピア科学研究所と工学研究科が中心となり、「環境」をキーワードに広範な分野で連携・協力を行っています。

今回の技術交流会は、この協定に基づく第1回連携協議会の開催に合わせて企画され、当日は、約80名の参加がありました。北川邦行エコトピア科学研究所副所長の司会のもと、宮田副総長と一村信吾産総研理事があいさつを行い、イノベーションの推進に向けた連携強化への意欲が述べられました。その後、本学及び産総研から各2名の研究者が、共同研究候補者として紹介講演を行いました。紹介講演は、本学と産総研の研究者をペアにして共通する研究テーマで行われ、本学からは、ナノ材料に関して水谷 孝工学研究科教授、ソノプロセスに関して小島義弘エコトピア科学研究所准教授が講演を行いました。

最後に松井エコトピア科学研究所長が基調講演を行い、同研究所の紹介とともに、この協定に基づく活動への期待が述べられました。終了後には、水谷教授の研究室の見学会及び懇親会を行い、連携の意義と期待を再確認した充実した交流会となりました。

## 退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催



記念撮影

本学退職者表彰式が、3月27日(木)、豊田講堂第一会議室において挙行されました。

これは、本年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、表彰式には、被表彰者51名のうち42名が出席し、平野総長から一人ひとりに表彰状と記念品が手渡されました。続いて、総長から祝辞があり、永年にわたる本学への尽力に対する感謝のことが述べられました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、退職職員懇談会が開催され、上記被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職する職員をはじめ、関係者が出席しました。佐分理事のあいさつの後、退職者を代表して横田研究所事務部長から謝辞が述べられました。

退職者は、出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

## 平成20年度春季全学留学生オリエンテーションを実施



説明を熱心に聞く留学生

平成20年度春季全学留学生オリエンテーションが、4月8日(火)、シンポジオンホールにおいて実施されました。このオリエンテーションは、4月に新しく入学した留学生を対象に全学オリエンテーションとして開催されたもので、留学生センター、留学生相談室や附属図書館等の協力のもと、日本語と英語により実施し、100名を超える留学生が参加しました。

当日は、DVDによる大学紹介に引き続き、石田留学生センター長から歓迎のあいさつがあり、その後、各担当の教職員から、日本語教育の受講上の留意点や図書館の利用案内等について説明がありました。その後、松浦留学生相談室長等から、本学における留学生支援体制、生活上の注意事項やカルチャーショックへの対処法等についてのガイダンスがあり、担当者の熱心な説明に、参加した留学生は真剣な表情で聞き入っていました。

## 三省堂書店学習図書援助制度による図書贈呈式が挙行される



留学生に図書を贈呈する茂木理事

株式会社三省堂書店学習図書援助制度による図書贈呈式が、4月11日(金)、法政国際教育協力研究センター CALE フォーラムにおいて行われました。これは、同社が手がける私費外国人留学生学習援助制度の一環として13年前から関東、関西地区を中心に行われているもので、本学では今年で3回目となります。

当日は、同社から西端忠光同社取締役をはじめ6名が本学を訪れ、杉山理事列席のもと、まず、西端取締役から「日本で学ぶ留学生に図書を進呈することによって、学習援助の一助となり、日本での留学目的が達せられれば幸いです」とあいさつがありました。これを受けて、杉山理事から、同社の本学留学生に対する支援への感謝と、留学生に対しますます学業に励むよう激励の言葉がありました。その後、茂木光則同社理事より4名の留学生一人ひとりに図書が贈呈されました。式典終了後には、昼食をとりながら和やかに懇談が行われました。

## 学生による学生のための「學生之新聞」

情報文化学部社会システム情報学科2年  
岡本 美紀



キャンパスライブ2008 出展ブースの様子

「近頃の学生は新聞を読まない！」と言われていますが、多くの情報を吸収することのできる学生時代に新聞を読まないのはもったいないと思います。学生が面白いと思えるコーナーがあったら、少しでも新聞を身近に感じてもらえるかもしれない……。私は、読者が学生生活を充実させるヒントとなるような情報を発信していきたいと思い、毎週火曜日、中日新聞に掲載されている「學生之新聞」の学生スタッフに参加しました。

「學生之新聞」スタッフは月に2回会議を開き、学生に興味を持ってもらえる記事作りに励んでいます。メンバーは東海地方を中心とした大学生、大学院生、専門学校生からなり、個性溢れる学生たちが刺激を与えあっています。

學生之新聞の紙面づくりは、会議に企画を持ち寄るところから始まります。大学で流行っていること、自分が興味を持っていること、ニュースに関連したことなど、企画の内容は様々です。会議で他のスタッフの意見を聞き、取材の趣旨や方法、態勢などが固まったら、取材や調査に移ります。私は、教育問題や学校裏サイトなど中高生に関するニュースが増えてきていることに着目し、最近の中高生が何を考えているのかを知ろうと、中高生と学生スタッフの座談会を企画しました。座談会では、実際に中高生を集めて彼らの生の声を聞き、ニュースを見ているだけではわからない、自分たちの問題とまじめに向き合おうとしている中高生の姿を伝える記事を書くことができました。私はこの企画を通して、テーマ設定の仕方や、会議における参加者の発言のまとめ方を学びました。

学生スタッフの活動は紙面上にとどまりません。東海地方のサークルや学生団体がナゴヤドームに集まり活動を紹介する「キャンパスライブ2008」への参加や、スタッフがそれぞれの専門分野を活かして中高生向けに出前授業をすることもあります。

今年の4月から、新たに學生之新聞 WEB版がスタートしました。インターネット上で気軽に記事を読むことができ、コメントを投稿することもできるWEB版は、新聞の新しい試みとも言えます。

これからも新しい企画やコーナーを考え、学生のための紙面を作るよう、學生之新聞のスタッフ一員として努力していきます。

## 學生之新聞 WEB版

<http://edu.chunichi.co.jp/gakusei/>



紙面について記者と話し合う筆者（左）

おかもと みき  
1989年生まれ  
愛知県出身

# 緑藻の生物時計遺伝子から植物時計の進化を探る

石浦 正寛 遺伝子実験施設教授

地球上では24時間周期で昼夜が交替し、光や温度などが24時間周期で規則的に変動しています。バクテリアの一種である藍色細菌（藍藻とも呼ばれます。）からヒトに至るまで地球上に棲息するほとんど全ての生物はこの周期的な環境変動に適応するために「生物時計」を進化させてきたと考えられています。この時計を持つ生物は環境変動を事前に予測し、それに上手く対応することができますが、時計を人為的に壊した変異体では、生育や生存に不都合が生じることが分かっています。動物が繁殖期の到来を知り生殖腺を発達させたり、植物が特定の季節に花を咲かせたりすることができるのもこの時計のお蔭です。この現象は「光周性」と呼ばれており、その仕組みはまだ良く分かっていませんが、生物は時計の働きを利用して、一日の日照時間（「日長時間」と呼びます）を正確に測定して、季節の到来を知ることができるのです。

精巧な分子装置である生物時計は細胞内で24時間の時を正確に刻んでいます。最も研究が進んでいる藍色細菌の生物時計分子装置は、3つの「時計タンパク質」から構成されているタンパク質複合体です。時計の発振の仕組みはまだ良く分かっていませんが、時計タンパク質の原子構造に基づいた詳細な解析が進んでいます。

時計の部品である時計タンパク質の設計図（タンパク質をコードする暗号）である「時計遺伝子」は、動物（哺乳類、昆虫）や高等植物、菌類（アカパンカビ）、藍色細菌で発見されています。共通の時計遺伝子が動物では見つっていますが、植物系の細胞である藍色細菌や高等植物では見つかりません。また動物、植物、菌類で共通する時計遺伝子も見つかりません。これは、こ

れらの生物では時計が異なった時計タンパク質で構成されていること、また進化の過程でこれらの生物が異なった時計を獲得したり、古い時計を失って新しい時計を獲得したりしたことを意味しています。なぜこのように一見無駄と思われることが生物の進化の過程で起こったのでしょうか。大変不思議なことです。

藍色細菌を除けば、藍色細菌から高等植物に至る植物系の細胞の生物時計（「植物時計」と呼ぶことにします）は解明があまり進んでいません。そこで、私たちは、この植物時計に焦点を合

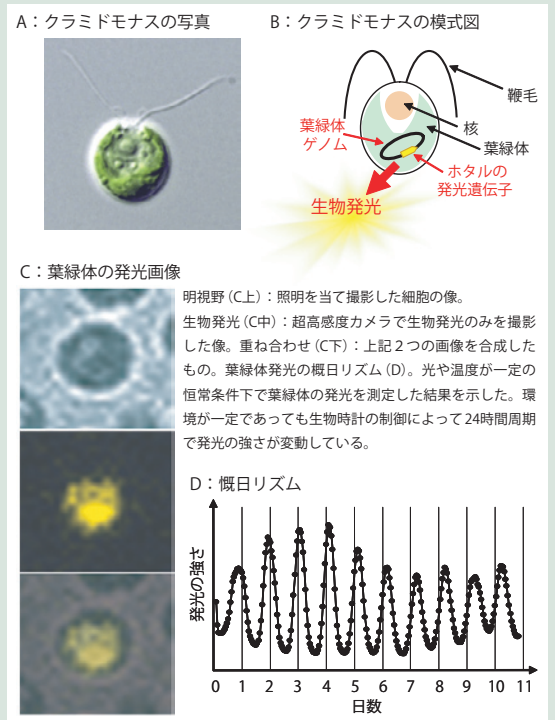


図1 「光る葉緑体」をもつクラミドモナス



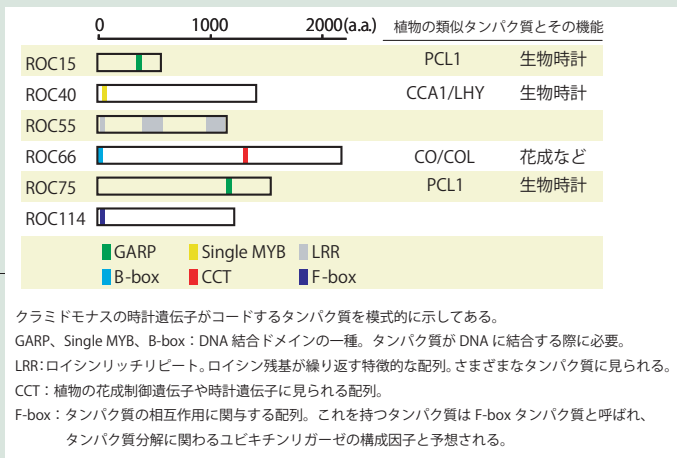


図2 クラミドモナスの生物時計の部品

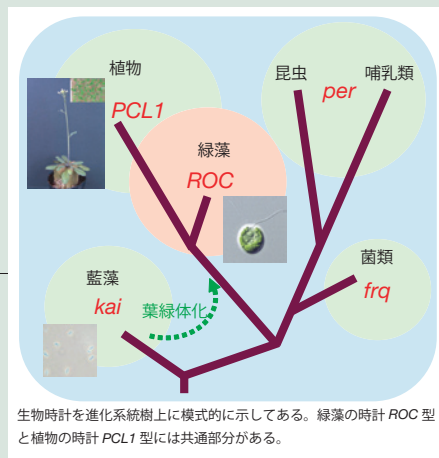


図3 生物の進化と生物時計

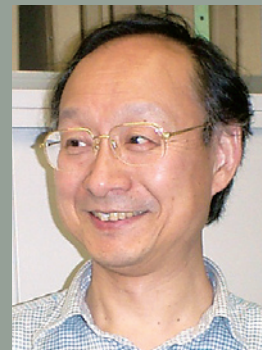
わせて研究することにしました。緑藻は進化の過程で真核細胞（細菌とは異なり核を持つ生物の細胞）に藍色細菌が細胞内共生して葉緑体となったことによって生じ、現在の陸上植物の直接の祖先となったと考えられています。実験モデル生物として優れた特性を持つので「緑の酵母」とも呼ばれるクラミドモナスは、単細胞性の緑藻で、2本の鞭毛で動物のように水中を泳ぎ、大きな1つの葉緑体で植物のように光合成を行っています（図1A）。まず生物時計の運行状況を容易に観察するために、ホタルの発光遺伝子であるルシフェラーゼ遺伝子を葉緑体ゲノムに組み込んで、「光る葉緑体」を持つクラミドモナスを作製しました（図1B、C）。生物時計によって制御されている葉緑体の発光の強さは24時間周期で変動します（図1D:このような変動を「概日リズム」と呼びます）。次に、遺伝子タギング法で目印となる DNA タグを核ゲノムに挿入し、挿入部位の遺伝子を破壊して、葉緑体の発光リズムが狂った105個の変異体を得ました。これらの変異体の原因遺伝子を同定し、最終的に葉緑体の概日リズムの発振に重要な30個の遺伝子を見つけました。そのうちの6個が時計遺伝子でした。4つは転写因子の遺伝子（*ROC15*、*ROC40*、*ROC66*、*ROC75*；*ROC*は Rhythm of Chloroplast の略）、残りの2つはそれぞれ F-box タンパク質の遺伝子（*ROC114*）と機

能未知のタンパク質（*ROC55*）の遺伝子でした（図2）。4つの転写因子遺伝子のうち3つ（*ROC15*、*ROC40*、*ROC75*）は部分的に高等植物の時計遺伝子と類似していました。もう一つ（*ROC66*）は高等植物の花成制御遺伝子と類似していました。しかし、*ROC55*と *ROC114*には他の生物の遺伝子との類似点は見つかりませんでした。これらの結果から、クラミドモナスの生物時計は植物の特徴とクラミドモナス固有の特徴を合わせ持っていることが明らかになりました。

これまで少なくとも4種類の時計（哺乳類や昆虫の *per* 型、高等植物の *PCL1* 型、菌類の *frq* 型、藍藻細菌の *kai* 型）の存在が分かっていました（図3）が、今回、緑藻で新たに *ROC* 型が見つかりました。*ROC* 型の時計は高等植物の時計と部分的に共通しているので、植物時計の進化の過程で何が失われ、何が保存され、何が新たに獲得されてきたのかを今後の研究で解明することができるでしょう。また、藍色細菌が持っていた *kai* 型時計は、緑藻の進化の段階で完全に失われてしまっていたことも分かりました。色んな型の時計を詳細に比較検討することで、時計発振の仕組みの本質に迫ることができると考えています。今回私たちが確立したクラミドモナスの実験系は真核生物の生物時計の仕組みを研究する上で格好のモデル系となるでしょう。

1949年京都生まれ。1971年金沢大学理学部生物学科卒業、1976年大阪大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学、78年理学博士（大阪大学）、1999年名古屋大学遺伝子実験施設教授、2004年同施設長、高等研究院教員。この間に大阪大学微生物病研究所助手、基礎生物学研究所助手、名古屋大学理学部生物学科助教授を務める。専門は生物時計分子装置のナノ装置学、ゲノム機能学。人がやらない隙間から普遍を目指している。

いしうら まさひろ



## 22. 豊田講堂（最終回）



今回は、豊田講堂改修・増築工事記事の最終回として、プロジェクトの実現に至ったこれまでの経緯と、最近の利用事例を紹介します。

### ■構想からの経緯

本学では、かねてから市民との連携や国際的なインターフェースを念頭に置いた「芸術・文化を通じた社会貢献の要」としての文化施設を整備する構想がありました。



平成12年2月の学術憲章制定や博物館設置、平成13年10月の「芸術文化プラザ構想」の記者発表、平成13年12月の文化芸術振興基本法施行などを背景に、この構想の具体化に向けて議論が活発化し、平成15年12月には整備委員会（当時）の下に「芸術文化プラザ（仮称）計画推進検討委員会」が設置されました。この検討委員会は、後の委員会再編に伴い「創知交流プラザ（仮称）計画推進検討ワーキンググループ」へと変化し、基本構想をはじめ、企画・運営手法や組織などのソフト面まで踏み込んだ検討を重ねることにより、豊田講堂の「再生」及び「機能強化」と、豊田講堂を核とした「機能拡充」を柱とするコンセプトを固めていきました。

計画を具体化する作業の中で、平成17年5月、





本学構成員を対象に「豊田講堂改修に関するアンケート」を実施し、その結果を尊重した上で、6月に豊田講堂改修計画（案）を策定しました。

その後、設計作業と併行して、トヨタ自動車株式会社プラント・エンジニアリング部（プロジェクト統括担当）、楨総合計画事務所（設計担当）及び本学検討ワーキンググループを中心とするメンバーによる議論が数回にわたり行われ、平成18年11月には設計を完了し、起工式を経て、12月に工事を着工する運びとなりました。前述の計画（案）は本学の求めるニーズや利用方針を設計内容に反映していく上での骨子として、非常に重要な位置づけとなったものです。

工事の完了後、平成20年1月中旬頃に行政庁等の検査や種々の準備を終え、2月2日（土）、豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイを迎えることができました。

#### ■開館後の利用について

豊田講堂の完成後、ホームカミングデイをはじめ、名古屋大学フォーラム2008等、いくつかの大きなイベントが開催されています。前年度の卒業式と今年度の入学式は、共に新しい豊田講堂で実施され、増設ホワイエ等への座席設置により、卒業生・修了生が一堂に会しました。また、教育学部附属中・高等学校の卒業式では、生徒たちが自らの手で舞台袖の機器操作を行い、手作りのプログラムで挙行されました。

#### ■プロジェクトを振り返って

これまで4回にわたり、豊田講堂改修・増築プロジェクトについて紹介してきました。

老朽化した多くの貴重な近代建築が修復保全の機会を得ずに姿を消していく中、このプロジェクトの成果は、次世代への保存継承の切符を手にした事例として、建築界のみならず社会的にも大きな意味を持つものであるといえるでしょう。

最後に、豊田講堂改修・増築工事の実施にあたり、本学に対する深い理解とともにプロジェクト全体を統括いただいたトヨタ自動車株式会社プラント・エンジニアリング部の皆様をはじめ、楨総合計画事務所、株式会社竹中工務店、計画段階から多岐にわたる学内調整に御協力いただいた多くの方々に、この誌面をお借りして心より感謝申し上げます。

（施設管理部）

1	4	5
2	3	

- 1 入学式での豊田講堂前庭・芝生広場の様子
- 2 入学式では増設ホワイエ等に座席を設置
- 3 完了検査の様子。増設ホワイエ周囲に設置された防火スクリーンは、通常天井内に格納されている。
- 4 入学式に続いて開催された入学祭典。多数のサークルがステージ上でパフォーマンスを披露。
- 5 教育学部附属中・高等学校卒業式の舞台袖。生徒たちが自らの手で映像設備を操作。

## 日中国際シンポジウム「WTO体制下の日中通商政策－ラウンド交渉・紛争解決・法整備」を開催

●法政国際教育協力研究センター、大学院法学研究科

法政国際教育協力研究センター及び大学院法学研究科は、3月15日(土)、16日(日)の両日、中国政法大学(北京市)において、国際シンポジウム「WTO体制下の日中通商政策－ラウンド交渉・紛争解決・法整備」を開催しました。

WTO加盟後6年が経過した中国は、WTO上の義務・約束を履行すべく着々と国内法の整備に努めてきました。



シンポジウムの様子

他方、WTOの紛争解決手続の側面では、中国の関係する紛争・摩擦が増加・激化する傾向にある中で、ラウンド交渉は硬直状態に陥っている状況です。

同シンポジウムは、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「アジア法整備支援のための実務・研究融合型比較法研究拠点」共同研究「WTO加盟に伴う国内法整備と国際紛争：解決手続」の一環として実施されたもので、その動向が最も注目されている中国と日本との通商政策の比較をつうじて、その共通点と相違点を析出することで相互理解を促進し、ラウンド交渉での両国の協力関係を模索することを目的としました。

日本側からは川島富士雄国際開発研究科准教授、内記香子大阪大学准教授、渡邊頼純慶應義塾大学教授、山下一仁農林水産省農村振興局次長、田村暁彦経済産業研究所コンサルティングフェローが、中国側からは、中国政法大学の馬呈元教授、史曉麗教授、時建中教授、祁歆副教授、辛崇陽副教授、劉銀良副教授、朱玲娣副教授、そして、周超中国農業大学講師が、報告を行い、活発な議論が展開されました。

## シンポジウム「産学連携、大学間連携による人材育成の充実」を開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科は、3月17日(月)、シンポジウム「産学連携、大学間連携による人材育成の充実」を、国際開発研究科多目的オーディトリウムにおいて開催しました。

はじめに、荒山経済学研究科長から同研究科の研究、社会貢献などの現状について説明があった後、西村眞経済学研究科教授の司会のもと、パネリストとして学外から、



シンポジウムの様子

早川英男日本銀行名古屋支店長、大辻義弘中部経済産業局長、平田誠一ブラザー工業株式会社代表取締役副会長、矢野武新東工業株式会社代表取締役会長が、また、学内から寺田教育発達科学研究科長、野口晃弘経済学研究科教授が登壇し、活発な議論を行いました。

各パネリストからは、「経済がグローバル化し、国境を越えた企業間競争が激化したことで、企業が行うOJT(オンザジョブトレーニング)の枠組では十分な社員教育ができなくなっており、大学における教育と企業の行う教育の隙間を埋められるかどうか、今後の日本の国際競争力に大きな影響を持つ。」「大学における教育のあり方について、社会のニーズを踏まえ、また、企業と連携しながら、そのシステムを構築することが喫緊の課題となる。」「地元企業が名古屋大学に寄せる期待は大きい。中部は世界に誇る製造業の集積をもつことから、経済学研究科がその役割を担う教育機関になることを期待している。」との発言があり、参加した教員及び大学院生らは熱心に聞き入っていました。

なお、同日は、シンポジウムに先立ち、経済学研究科外部評価委員会が、経済学研究科第1会議室において開催されました。

# 農学国際教育協力研究センター第11回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、3月24日(月)、第11回オープンセミナーを開催しました。国際協力機構(JICA)国際協力専門員で同センター客員教授の時田邦浩氏が、「国際協力が大学の社会貢献の機軸となるために」と題し、農業開発のための大学・研究機関と国際協力機関の連携方策に関する研究について講演しました。



会場の様子

時田氏は、日本の政府開発援助(ODA)で大学が協力した農業・農学分野での国際協力のこれまでの内容と最近の動き、日本のODA予算が最盛期の約6割と減少した環境の変化と課題、大学を取り巻く環境の変化と、その中で大学の国際協力の動き、最近の国際協力における大学と国際協力機関のそれぞれの予算による連携事業の可能性などを紹介しつつ、双方にとってメリットとなる事業のあり方について論じました。

さらに、競争的資金獲得の一環として大学が開発途上国における技術協力プロジェクトを事業受託するために取り組むべき行動について、本学の国際戦略の観点から提言がなされました。とくに、農学国際教育協力研究センターが行うべき社会貢献のための実施体制の強化とともに、途上国の人材に加え、日本人の国際農業協力人材の育成、国際農業協力分野での研究協力による課題解決、アジア・アフリカ農業ネットワークによる拠点大学による域内大学支援が提案されました。講演終了後には参加者との質疑応答が続き、同セミナーは盛況のうちに終了しました。

## 役員等

総長	平野 眞一
理事（国際交流・産学官連携関係担当）・副総長	宮田 隆司
理事（財務・学術情報関係担当）・副総長	大峯 巖
理事（人事・労務・法務関係担当）・副総長	佐分 晴夫
理事（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長	杉浦 康夫
理事（教育関係担当）・副総長	杉山 寛行
理事（研究関係担当）・副総長	山本 進一
理事（総務・事務総括関係担当）・事務局長	高橋 誠

## 経営協議会委員

学外委員	
中部電力株式会社代表取締役会長	川口 文夫
お茶の水女子大学長	郷 通子
学校法人名古屋電気学園理事長・総長	後藤 淳
財団法人長寿科学振興財団理事長	小林 秀資
株式会社デンソー取締役会長	齋藤 明彦
東レ株式会社代表取締役社長	榊原 定征
愛知県立大学長	佐々木雄太
日本ガイシ株式会社代表取締役会長	柴田 昌治
株式会社ナゴヤドーム副社長	角田 牛夫
伊藤忠商事株式会社取締役会長	丹羽宇一郎

(五十音順)

## 教育研究評議会評議員

総長	平野 眞一
理事	大峯 巖
理事	杉山 寛行
理事	山本 進一
文学研究科長	和田 壽弘
教育発達科学研究科長	速水 敏彦
法学研究科長	杉浦 一孝
経済学研究科長	金井 雄一
情報文化学部長	横井 茂樹
理学研究科長	近藤 孝男
医学系研究科長	濱口 道成
工学研究科長	小野木克明
生命農学研究科長	服部 重昭
国際開発研究科長	二村 久則
多元数理科学研究科長	庄司 俊明
国際言語文化研究科長	吉村 正和
環境学研究科長	林 良嗣
情報科学研究科長	古賀 伸明
環境医学研究所長	村田 善晴
太陽地球環境研究所長	藤井 良一
エコトピア科学研究科長	松井 恒雄
附属図書館長	伊藤 義人

副総長（評価・総合企画関係担当）	松下 裕秀
参与	奥村 洋彦 †
参与	金田 新 †
参与	中村 利雄 †
参与	林 光佑 †
参与	山田 直 †
監事	木村 洋一
監事	湯本 秀之 †

†印は非常勤

学内委員	
総長	平野 眞一
理事	宮田 隆司
理事	大峯 巖
理事	佐分 晴夫
理事	杉浦 康夫
理事	杉山 寛行
理事	山本 進一
理事	高橋 誠
医学部附属病院長	松尾 清一
附属図書館長	伊藤 義人

医学部附属病院長	松尾 清一
総合保健体育科学センター長	近藤 孝晴
文学研究科	町田 健
教育発達科学研究科	早川 操
法学研究科	市橋 克哉
経済学研究科	多和田 眞
理学研究科	大島 隆義
医学系研究科	高橋 雅英
工学研究科	井上順一郎
生命農学研究科	坂神 洋次
国際開発研究科	藤川 清史
多元数理科学研究科	木村 芳文
国際言語文化研究科	前野みち子
環境学研究科	山口 靖
情報科学研究科	大西 昇
教育研究共同施設連合選出	石田 幸男
教育研究共同施設連合選出	小林 迪弘
評議会選出	神塚 淑子
評議会選出	吉田 俊和
評議会選出	佐野 充
評議会選出	阿草 清滋

総長補佐

国際交流・留学生担当	野水 勉
産学官連携担当	大日方五郎
産学官連携担当	太田美智男
人事労務・人権（苦情処理）担当	和田 肇
男女共同参画担当	東村 博子
人権（セクハラ）担当	村瀬 聡美
法務担当	本間 靖規
鶴舞地区担当	室原 豊明

施設整備担当	谷口 元
労働安全担当	山根 隆
教育担当	山本 一良
教育担当，研究推進担当	周藤 芳幸
研究推進担当	馬場 嘉信
研究・教育支援担当	中村 新男
社会連携・社会貢献担当	家森 信善

部局長等

本部		
事務局	事務局長	高橋 誠
総務部	総務部長	岩川 雅士
	総務課長	原 健四郎
	秘書課長	吉田 一光
	人事労務課長（事務取扱）	岩川 雅士
	人事主幹	藤井 昭彦
財務部	財務部長	松川 誠司
	財務課長	松本 歩
	財務調整主幹	武田 実
	経理・資産管理課長	谷口 哲也
	契約課長	金澤 正雄
研究協力部	研究協力部長	井深 順二
	研究支援課長	浅見 宏信
	社会連携課長	鈴木 慰人
国際部	国際部長（事務取扱）	高橋 誠
	国際企画課長	本村 宏明
	国際学生交流課長（兼務）	本村 宏明
施設管理部	施設管理部長	山口 博行
	施設企画課長	細野 俊治
	施設整備課長	小谷 隆男
	施設管理課長	加藤 好孝
	環境安全主幹	村井 丈深
学務部	学務部長	茶畠 豊
	学務企画課長	熊谷 英男
	教養教育院事務主幹	加藤 貞男
	学生総合支援課長	高橋神奈男
	入試課長	田上 隆

運営支援組織	産学官連携推進本部長	宮田 隆司	
	国際交流協力推進本部長	宮田 隆司	
	情報連携統括本部長	大峯 巖	
	情報推進部長	多田 正和	
	情報推進課長	虎澤 千恵	
	情報基盤課長	瀬川 午直	
	環境安全衛生推進本部長	杉浦 康夫	
	環境安全衛生管理室長	山根 隆	
	施設計画推進室長	谷口 元	
	核燃料管理施設長	山根 義宏	
	評価企画室長	松下 裕秀	
	セクシュアル・ハラスメント相談所長	近藤 孝晴	
	社会連携推進室長	家森 信善	
	災害対策室長	鈴木 康弘	
	国際学術コンソーシアム推進室長	野水 勉	
	男女共同参画室長	東村 博子	
	法務室長	本間 靖規	
	広報室長	渡辺 芳人	
	リスク管理室長	佐分 晴夫	
	総合企画室長	松下 裕秀	
総合企画室主幹	大矢 淳一		
研究推進室長	馬場 嘉信		
監査室	監査室長	佐分 晴夫	
教養教育院	教養教育院長	若尾 祐司	
高等研究院	高等研究院長	近藤 孝男	
文学部・文学研究科	文学研究科長・文学部長	和田 壽弘	
	教育学部・教育発達科学研究科	教育発達科学研究科長・教育学部長	速水 敏彦
		附属中学校長	植田 健男
	附属高等学校長	植田 健男	
法学部・法学研究科	法学研究科長・法学部長	杉浦 一孝	
	附属法情報研究センター長	松浦 好治	
経済学部・経済学研究科	経済学研究科長・経済学部長	金井 雄一	
	附属国際経済政策研究センター長	野口 晃弘	

文系事務部	事務部長	青山 生修	国際言語文化研究科	国際言語文化研究科長	吉村 正和	
	総務課長	柳 育夫		環境学研究科	環境学研究科長	林 良嗣
	経理課長	土井 悟			附属地震火山・防災研究センター長	山岡 耕春
	教務課長	杉浦 克博			附属交通・都市国際研究センター長	日比野高士
情報文化学部	情報文化学部長	横井 茂樹	環境学研究科・地球水循環研究センター事務長		佐藤 重明	
	情報文化学部・情報科学研究科事務長	伊藤 正彦	情報科学研究科	情報科学研究科長	古賀 伸明	
理学部・理学研究科	理学研究科長・理学部長	近藤 孝男		附属組込みシステム研究センター長	高田 広章	
	附属臨海実験所長	澤田 均	環境医学研究所	環境医学研究所長	村田 善晴	
	附属南半球宇宙観測センター長	福井 康雄		附属近未来環境シミュレーションセンター長	児玉 逸雄	
	附属構造生物学研究センター長	前田雄一郎	太陽地球環境研究所	太陽地球環境研究所長	藤井 良一	
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	森本 正廣		附属ジオスペース研究センター長	荻野 瀧樹	
	医学部・医学系研究科	医学系研究科長・医学部長	濱口 道成	エコトピア科学研究科	エコトピア科学研究科長	松井 恒雄
附属医学教育研究支援センター長		高橋 雅英	附属アジア資源循環研究センター長		長谷川達也	
附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長		高橋 雅英	研究所事務部	事務部長	服部 幸博	
附属病院長		松尾 清一		総務課長	松岡真一郎	
大幸医療センター長		濱島 信之		経理課長	井沢 文雄	
医学部・医学系研究科事務部長		野間 省二	附属図書館	附属図書館長	伊藤 義人	
事務部次長		青山 正晴		医学部分館長	高松 純樹	
総務課長		大岩 淳一		研究開発室長	伊藤 義人	
人事労務主幹		野村 重信		附属図書館事務部長	川瀬 正幸	
大幸地区事務主幹		伊藤 秀夫		情報管理課長	井上 修	
学務課長（事務取扱）		青山 正晴		情報サービス課長	増田 晃一	
経営企画課長		後藤 隆文		情報システム課長	渡邊 俊彦	
経理課長		葛西 勇		地球水循環研究センター	地球水循環研究センター長	上田 博
施設管理主幹		祖父江信和		情報連携基盤センター	情報連携基盤センター長	阿草 清滋
医事課長		長谷川浩一		学内共同教育研究施設等	アイソトープ総合センター長	饗場 弘二
包括評価主幹		野口 信子	遺伝子実験施設長		石浦 正寛	
医療サービス課長		川島 秀司	留学生センター長		石田 幸男	
工学部・工学研究科		工学研究科長・工学部長	小野木克明		物質科学国際研究センター長	巽 和行
		附属プラズマナノ工学研究センター長	鈴置 保雄		高等教育研究センター長	戸田山和久
		工学部・工学研究科事務部長	位田 敏夫		農学国際教育協力研究センター長	山内 章
	総務課長	松永 和雄	年代測定総合研究センター長	中村 俊夫		
	社会連携主幹	田崎 政男	博物館長	西川 輝昭		
	経理課長	岡田 秀	発達心理精神科学教育研究センター長	森田美弥子		
	教務課長	浅田 貞彦	法政国際教育協力研究センター長	鮎京 正訓		
農学部・生命農学研究科	生命農学研究科長・農学部長	服部 重昭	生物機能開発利用研究センター長	小林 迪弘		
	附属農場長	柳沼 利信	情報メディア教育センター長	大峯 巖		
	附属演習林長	太田 岳史	小型シンクロトン光研究センター長	竹田 美和		
	附属山地畜産実験実習施設長	海老原史樹文	大学文書資料室長	羽賀 祥二		
	附属鳥類バイオサイエンス研究センター長	吉村 崇	学生相談総合センター長	鈴木 國文		
	農学部・生命農学研究科事務長	社本 好由	留学生相談室長	松浦まち子		
総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長	近藤 孝晴	全学技術センター	全学技術センター長	山本 進一	
国際開発研究科	国際開発研究科長	二村 久則				
多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	庄司 俊明				



本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 生き物文化誌学会半田例会「発酵醸造物と食文化、地域のかかわり」15日開催：平野眞一総長出席	3.16 (日) 3.29 (土) 3.31 (月)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
2 本学とNHK名古屋文化センターの連携による3年がかりの市民講座「大河講座－ひとの大学」(全60回) 4月スタート	3.16 (日)	読売
3 モノづくりから未来へ ～中部圏経済サミット～28日開催：平野眞一総長	3.17 (月) 3.29 (土) 3.31 (月)	中日 (朝刊)
4 本学 グリーンランド北部で始まる国際氷床掘削計画に参加	3.17 (月)	中日 (朝刊)
5 貝淵弘三・医学系研究科教授が「第18回読売東海医学賞」を受賞	3.17 (月) 3.18 (火)	読売
6 科学技術の情報戦 生田幸士・工学研究科教授は、研究室のホームページに最新の研究成果を掲載していたが、アメリカで似たような研究成果が特許出願されたことを受け公開を中止 「アメリカの研究機関は研究室のサイトをいつも監視している」と警戒する	3.17 (月)	日経 (朝刊)
7 やさしい経済学－21世紀と文明 未来世代への責任 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ②人類の英知の進化	3.17 (月)	日経 (朝刊)
8 医療と健康：川村小児科病院長・川村正彦氏・本学卒業生 低身長	3.17 (月)	中日 (朝刊)
9 大日方五郎・エコトピア科学研究所教授らの研究グループは、運転手の注意力散漫をリアルタイムで評価するシステムを完成	3.18 (火)	日刊工業
10 理化学研究所・客員研究員・竹中康司・工学研究科准教授らは、熱で膨張しないマンガン窒化物だけで作られたセラミック材料を開発	3.18 (火)	朝日 (朝刊)
11 「政務調査費の情報公開を求める市民の会」(代表・水田洋・本学名誉教授)などは、「領収書の公開」を公約した7市議会議員に再び公開質問状を提出	3.18 (火)	中日 (朝刊)
12 やさしい経済学－21世紀と文明 未来世代への責任 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ③文明の加速度進化	3.18 (火)	日経 (朝刊)
13 やさしい経済学－21世紀と文明 未来世代への責任 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ④「地上資源」文明へ	3.19 (水)	日経 (朝刊)
14 吉村崇・生命農学研究科准教授らのグループが、脊椎動物の甲状腺刺激ホルモンが春の訪れを告げ、繁殖などの行動を促すことを解明	3.20 (木) 3.24 (月)	中日 (朝刊) 他4社 日刊工業
15 伊藤繁・理学研究科教授らのグループは、褐虫藻が光合成をする際に働くタンパク質の一種「集光性クロロフィルタンパク質」に着目 サンゴの白化は、この藻類が高水温で機能を喪失するためであることを突き止める	3.20 (木)	中日 (朝刊)
16 伊山修・多元数理科学研究科准教授が日本数学会代数学賞に選ばれる	3.20 (木)	中日 (朝刊)
17 井上重信氏・本学卒業生は、退職後に入学した同朋大学大学院で親鸞の教えを学び、文学博士の学位を取得	3.20 (木)	読売
18 やさしい経済学－21世紀と文明 未来世代への責任 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ⑤文明交代の転機	3.20 (木)	日経 (朝刊)
19 やさしい経済学－21世紀と文明 未来世代への責任 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ⑥教育の最大目標	3.21 (金)	日経 (朝刊)
20 澤田均・理学研究科教授、原田淑人・同研究科助教のグループは、ホヤなど雌雄同体生物が自家受精を避ける仕組みを解明	3.21 (金)	朝日 (朝刊)
21 マイナス80：竹内恒夫・環境学研究科教授 気候政策 1	3.21 (金)	中日 (朝刊)
22 中日文化センター：町田健・文学研究科教授 「町田健の『おもしろ言語学』」	3.21 (金)	中日 (夕刊)
23 中日文化センター：筑波大学教授・今泉容子氏・本学卒業生 「世界シネマ紀行3－名画のクライマックス・シーンめぐり」	3.21 (金)	中日 (夕刊)
24 叙位叙勲：従四位瑞宝小綬章 近 璋三・本学名誉教授	3.22 (土)	読売
25 紙つぶて：福井康雄・理学研究科教授 オペラの楽しみ	3.22 (土)	中日 (夕刊)
26 学生に裁判手続きの理解を深めてもらおうと、本学で愛知県内の法科大学院4校対抗の模擬裁判開催	3.23 (日)	読売
27 錫村明生・環境医学研究所教授、竹内英之・同研究所助教らのグループは、自己免疫疾患の治療に抗体を用いない新たな治療法を発見	3.24 (月)	日刊工業
28 現在を読む：布施哲・国際言語文化研究科准教授 新卒一括採用 「空白」に不寛容な社会の問題	3.24 (月)	毎日 (朝刊)
29 やさしい経済学－21世紀と文明 未来世代への責任 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ⑦科学館ネットワーク	3.24 (月)	日経 (朝刊)
30 尾鷲市長に本学卒業生・奥田尚佳氏が当選	3.24 (月)	中日 (朝刊) 他2社

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
31 速水敏彦・教育発達科学研究科教授に「大学生（短大・大学院生を含む）の卒業に対する満足度調査」の結果について感想を聞く	3.25 (火)	中日 (朝刊)
32 地球発熱：日本青年会議所の自転車の環境有用性をうたった「地球温暖化防止アクションプラン」に対し、森川高行・環境学研究科教授は、「駐輪場の整備と使用者のマナー向上がうまく進まないと、真の自転車社会はこない」と指摘する	3.25 (火)	中日 (朝刊)
33 広小路ルネサンス構想をめぐる関係者調整会議の副委員長・竹内恒夫・環境学研究科教授は、放置自転車対策として、広小路通で「レンタサイクル」を導入してはどうかと提案	3.25 (火)	中日 (朝刊)
34 やさしい経済学－21世紀と文明 未来世代への責任 総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 ⑧人類存続の鍵	3.25 (火)	日経 (朝刊)
35 学生之新聞：卒業記念特集号 小林さやかさん・本学学生 収穫の多い4年間	3.25 (火)	中日 (朝刊)
36 卒業旅行ルポ 小林さやかさん・本学学生 メキシコ編、丹羽亜衣さん・本学大学院生 台湾編	3.25 (火)	中日 (朝刊)
37 岐阜県職員・道家敏郎氏・本学卒業生が関市の副市長に選任される	3.25 (火)	中日 (岐阜県版 朝刊)
38 25日卒業式 学部生・大学院生合わせて4146人が卒業	3.25 (火) 3.26 (水)	中日 (夕刊) 読売
39 欧州合同原子核研究所に周囲27キロのリング状の加速器 LHC が完成 本学など15の大学や機関が、LHC に置かれる4台の測定器「アトラス」の建設と実験に参加	3.25 (火)	中日 (夕刊)
40 第1回公立病院等地域医療連携のための有識者会議25日開催：松尾清一・医学部附属病院院長が座長	3.26 (水)	朝日 (朝刊)
41 永井科学技術財団は2007年度の財団賞に佐々木浩一・工学研究科准教授ら8件と、国際交流助成金交付先に向井康人・同准教授ら2件を選定	3.26 (水)	日刊工業
42 高校美術の教科書検定 近藤孝弘・教育発達科学研究科准教授は、「美術の教科書から1つの作品を消し去るより、そのような社会における美術の在り方を生徒に考えさせる方が有益だろう」と話す	3.26 (水)	中日 (朝刊)
43 中部の教育：愛知教育大学次期学長・松田正久氏・本学卒業生に課題と抱負を聞く	3.26 (水)	読売
44 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授・成瀬恵治・元本学助教授らが立ち上げた、本学医学部発のベンチャー「ストレッチス」 細胞にストレスを負荷した新しい培養システムを実用化	3.26 (水) 4. 1 (火)	日刊工業
45 株式会社ジェイテクト取締役社長・横山元彦氏・本学卒業生に、仕事を通じて得られる「喜び」を聞く	3.26 (水)	中日 (朝刊)
46 本学 法科大学院内に日本の法令情報の国際的発信拠点となる「法情報研究センター」を設置	3.27 (木)	中日 (朝刊)
47 本学と理化学研究所は、睡眠時に発生する特異な脳波が大脳皮質の抑制性シナプスの伝達効率を高めることを世界で初めて発見	3.27 (木)	日刊工業
48 第20回 経営者 & 総務担当対象セミナー：東海学園大学経営学部教授・堀田友三郎氏・本学卒業生	3.27 (木)	朝日 (朝刊)
49 東邦ガス社長・水野耕太郎氏・本学卒業生が中部経済同友会の代表幹事に内定	3.27 (木)	中日 (朝刊)
50 アニメ大国の肖像：作家・辻 真先氏・本学卒業生 脚本家よ、未知の領域へ	3.27 (木)	中日 (朝刊)
51 名古屋市立大学に新設される病院局の局長に名古屋市立大学大学院医学研究科教授・上田龍三氏・本学卒業生が起用される	3.27 (木) 4. 2 (水)	日経 (夕刊) 中日 (朝刊)
52 愛知県産業界のこの一年 本学 07年4月「レーザーピーニング技術を開発」、07年8月「1フェムトリットル以下の液量噴出ピペットを製作」、08年3月「大岡昌博・情報科学研究科准教授らが指先の感覚再現装置を開発」	3.28 (金)	日刊工業
53 環境フォーラム・ヒマラヤ写真展「若者よ、地球を歩け～ヒマラヤ氷河が発信する明日へのメッセージ～」4月20日開催：藤田耕史・環境学研究科准教授 「今、ヒマラヤで起きていること」、パネリストに上田豊・本学名誉教授	3.28 (金) 3.29 (土) 4. 7 (月) 4. 9 (水) 4.11 (金) 4.12 (土)	朝日 (朝刊) 朝日 (夕刊)
54 朝日カルチャーセンター：山本直人・文学研究科教授 「縄文人と植物」、伊藤大輔・文学研究科准教授 「金刀比羅宮書院の美」	3.28 (金) 3.29 (土) 4. 4 (金)	朝日 (朝刊)
55 排泄ケア 日本の排泄ケアの土台になったと言われる「高齢者排尿管理マニュアル」は、本学が中心となり01年に作成	3.28 (金)	朝日 (朝刊)
56 訃報：荒川泰二・本学名誉教授	3.28 (金)	中日 (朝刊) 他4社
57 叙位叙勲：従四位瑞宝小綬章 武澤純・医学系研究科教授 (3月1日死去)	3.29 (土)	読売
58 風向計：家森信善・経済学研究科教授 証券取引所の役割とは？	3.29 (土)	読売
59 牛乳市民講座 牛乳と健康～ミルクの価値をもう一度考えよう～8日開催：松田幹・生命農学研究科教授	3.29 (土)	中日 (朝刊)
60 増子記念病院 まずこ健康開発センター健康講座4月1日～6月下旬開催：島岡清・総合保険体育科学センター教授	3.29 (土)	中日 (朝刊)
61 紙つぶて：福井康雄・理学研究科教授 かんばれドラゴンズ	3.29 (土)	中日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
62 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 ベトナムから見るイラク	3.30 (日)	中日 (朝刊)
63 第1回東海がんプロフェッショナル養成プラン市民講座「がん治療について一緒に考えていきましょう」29日開催	3.30 (日)	中日 (朝刊)
64 愛知県経営者協会会長・岡部弘氏・本学卒業生にモノづくりの「スピリット」を聞く	3.30 (日)	中日 (朝刊)
65 第17回漢方シンポジウム「食欲がなく、疲れやすい人のために～食欲と健康を考える～」2日開催：広瀬クリニック院長・広瀬滋之氏、藤田保健衛生大学教授・金子宏氏・両本学卒業生	3.30 (日)	読売
66 新指導要領 私はこうみる：浪川彦彦・多元数理科学研究科教授 言語としての数学の性質を明確に	3.31 (月)	日経 (朝刊)
67 本学と愛知県、名古屋市が研究した成果を県が整備し、東海・東南海地震での家屋倒壊を予測する防災学習システムを県のホームページで公開	3.31 (月)	中日 (朝刊)
68 本学とブラザー工業が、共同研究や研究者交流などで産学連携協定を締結	4. 1 (火)	中日 (朝刊) 他2社
69 本学と東京大学は、大気汚染物質が黄砂に付着して運ばれてくることを確認	4. 1 (火)	日経 (朝刊)
70 学生街ダンス：鈴木まり子さん・本学学生 「第1回 ALL 東海教育フェスタ '08 in 静岡」に参加	4. 1 (火)	中日 (朝刊)
71 新入留学生のためのバザー19日開催	4. 2 (水)	中日 (朝刊)
72 医学部附属病院で入院患者の方を音楽で元気づけようと、看護師や研修医らによるオカリナ演奏や、入院患者の方による歌のミニ演奏会が催される	4. 2 (水)	中日 (夕刊)
73 中日新聞高血圧セミナー「ウデをまくろう、東海！」5月10日開催：奥村健二・医学部教授 「上手な降圧薬の飲み方と血圧の管理」	4. 4 (金)	中日 (朝刊)
74 朝日カルチャーセンター：木俣元一・文学研究科教授 「西洋中世美術へのアプローチ」、樋口敬二・本学名誉教授 「ヒマラヤの氷河を語る」	4. 4 (金)	朝日 (朝刊)
75 風向計：フォーイン副社長・久保鉄男氏・本学卒業生 台湾に学ぶ自動車産業の未来	4. 4 (金)	読売
76 5日 豊田講堂で入学式が行われる 学部生、大学院生を合わせた4511人が入学	4. 5 (土)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊)
	4. 6 (日)	読売
77 いっしょに学ぼう：町田健・文学研究科教授 言葉通じる謎を解こう	4. 5 (土)	朝日 (朝刊)
78 航空宇宙産業の技術基盤強化のため、本学など中部の産学官が連携	4. 5 (土)	中日 (朝刊)
	4.12 (土)	日経 (朝刊)
79 紙つづて：福井康雄・理学研究科教授 ガリレオの家	4. 5 (土)	中日 (夕刊)
80 国内で67例目の脳死移植実施 医学部附属病院では右腎臓を40代女性に移植	4. 6 (日)	中日 (朝刊) 読売
81 病院の実力：2006年本学心臓外科手術件数は204件	4. 6 (日)	読売
82 小田裕昭・生命農学研究科准教授らは、不規則な脂っこい食事を続けると肝臓の「体内時計」が異常となり、同じ食事内容で規則正しく取った場合に比べ、血中コレステロール濃度が大幅に上がる可能性が高いことを、ラットの実験で確認	4. 6 (日)	日経 (朝刊)
83 スガウエザリング技術振興財団は2007年度研究助成に、堀 勝・工学研究科教授の「リモートプラズマ試験機内ラジカル絶対密度測定に基づく試験機の高性能化」など3件を選定	4. 7 (月)	日刊工業
84 マイナス80：竹内恒夫・環境学研究科教授 気候政策 2	4. 7 (月)	中日 (朝刊)
85 「車載組込みシステムフォーラム (ASIF)」設立総会7日開催：高田広章・情報科学研究科教授が会長に選出される	4. 8 (火)	中日 (朝刊)
86 「東海地域の企業は株主とどう向き合っていくべきか～個人株主のかかわりを中心に」7日開催：家森信善・経済学研究科教授が基調講演	4. 8 (火)	中日 (朝刊)
87 学生街ダンス：岩田優子さん・本学学生 夢こそ人が活動するエネルギー源	4. 8 (火)	中日 (朝刊)
88 学生之新聞：高木賢治さん・本学大学院生、岩田優子さん・同学生が新入生にアドバイス	4. 8 (火)	中日 (朝刊)
89 医学部附属病院小児科と関連病院は、子育て中の女性医師を短時間勤務で受け入れる取り組みを開始	4. 9 (水)	朝日 (朝刊)
90 医学研究 本学は「基礎医学セミナー」として医学部の3年生全員に半年間の研究を必修化 古川鋼一・医学系研究科教授は、「臨床医になる人も研究のイロハを学生のうちに経験するメリットは大きい」と、研究の大切さを強調する	4. 9 (水)	読売
91 時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 突然、花粉症になって	4. 9 (水)	中日 (朝刊)
92 古書の会 (「名古屋手紙の会」を改称) 16日開催：塩村耕・文学研究科教授	4. 9 (水)	中日 (夕刊)
93 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 同僚からのお礼状	4.10 (木)	朝日 (朝刊)
94 心をのぞく 性格・行動単純ではない：飯高哲也・医学系研究科准教授は、DNA 配列の個人差と扁桃体の活動の関係に注目	4.10 (木)	朝日 (夕刊)
95 森 郁恵・理学研究科教授、久原篤・同研究科助教らのグループは、においを感じる嗅覚細胞が温度も感じていることを、線虫を使った実験で突き止める	4.11 (金)	中日 (朝刊) 他4社

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
96 防災減災：福和伸夫・環境学研究科教授 家作りの基本は耐震	4.11 (金)	読売
97 日本形成外科学会（会長・鳥居修平・医学系研究科教授）の市民公開講座「いつまでも美しく健やかに」10日テレビアホールで開催	4.11 (金)	中日（朝刊）
98 乳がん相談会27日開催：澤木正孝・医学系研究科特任講師	4.11 (金)	中日（朝刊）
99 「住基ネット名古屋訴訟の勝利をめざす4・19集会」19日開催：愛敬浩二・法学研究科教授 「住基ネットと人権 改憲問題も踏まえて」	4.11 (金)	中日（朝刊）
100 浦部法穂・法学研究科教授は旧防衛庁官舎ビラ配り事件について、「具体的な被害が発生したかどうかを検証することが大事だ。自衛隊のイラク派遣という時期に、政策に逆らうことを許さない『結論ありき』の判決だったのではないか」と話す	4.12 (土)	日経（朝刊）
101 紙つぶて：福井康雄・理学研究科教授 漢文	4.12 (土)	中日（夕刊）
102 学生之新聞：平野真一総長 入学式の式辞	4.15 (火)	中日（朝刊）
103 名大サロンの主役：松尾清一・医学部附属病院長 年1回は腎臓チェック	4.15 (火)	中日（朝刊）
104 進む教育改革 文科省プログラム採択校にみる：多元数理科学研究科の取り組み	4.15 (火)	日刊工業
105 名古屋大学ライフトピア講演会「年を重ねるといふこと～その豊かさ、その幸せ～ 第二回」27日開催：大西丈二・医学部准教授 「健康で豊かな社会を考える／街でつくる老年学という新しい学問」	4.15 (火)	日経（夕刊）

## 第49回名大祭を6月5日(木)～8日(日)に開催

第49回名大祭が、6月5日(木)～8日(日)、東山キャンパスにおいて開催されます。同祭は、毎年6月に名古屋大学東山キャンパスにて行われる、約5万人の来場者数を誇る「東海地区最大規模の大学祭」で、名古屋大学名大祭本部実行委員会が企画・運営を行っています。

本年度のテーマ、「夢滴～ムテキ～」には「名大生の夢を、ほんの“しずく”程度、同じ方向に向けられたら無敵の力が出せる」という意味が込められています。みなさまお誘い合わせの上、お気軽にお越しください。

### 第49回名大祭「夢滴～ムテキ～」

開催日程：6月5日(木)～8日(日)

会場：東山キャンパス

最寄駅：地下鉄名城線名古屋大学駅下車 徒歩0分  
(お越しの際は公共交通機関をご利用ください。)



>>趣向を凝らした様々な企画の一部をご紹介します。

#### ■サークル、部活動による約90種類の多種多様なイベント

企画名：「演武会」

団体名：名古屋大学合気道部

内容：合気道には試合がありません。そこで、日頃の練習の成果を披露する為に演武会を行います。興味を持たれた方は是非一度御覧になって下さい。

企画名：「アカペラライブ “Let's ♪”」

団体名：名古屋アカペラサークル JP-act

内容：個性豊かなバンドによるアカペラライブを行います。人の声のみでつくる綺麗なハーモニーと素敵な時間をお楽しみ下さい。

#### ■約40以上の研究室の一般公開

企画名：「ボランティアをしませんか

～外国人児童に日本語を教えよう～

研究室：教育社会学研究室

内容：名古屋市内で外国人の子どもの多い小学校で日本語指導のボランティアをしませんか。大学内では学べない貴重な経験を得ることができます。

企画名：「計算機でパズルを解く～組合せ最適化アルゴリズム～」

研究室：平田研究室

内容：計算機で処理をするために必要な「アルゴリズム」。当日は、パズルを解くプログラムなどを通じて、アルゴリズムについて紹介いたします。

その他、古着やアクセサリ、手作り品など様々なものが販売されるフリーマーケットや、趣向を凝らした店が並ぶ模擬店などが出店します。

>>バリアフリー・環境への取り組みを行っています。

#### ■バリアフリーへの取り組み

学内のバリアフリーに関する情報をまとめた「バリアフリーマップ」を作成し、事前に情報を発信することで、障がい者の方や高齢者、妊婦、小さなお子さんの名古屋大学及び名大祭に対する不安を軽減し、安心して来場いただくことを目標としています。また、お一人で名大祭を回ることに不安をお持ちの方向けに「名大祭ツアー」と称し、ガイドとの2人1組で名大祭を自由に回っていただく取り組みも行います。当日は車椅子の貸し出しも行ってまいりますので、お気軽にご利用ください。

#### ■環境への取り組み

会場に出されるゴミを9つの項目により細かく分別します。また、100%リサイクル可能な「はがせるトレイ」を模擬店出店者に安価で斡旋するなどし、会場に出るごみの大半をリサイクルすることを実現化しています。その他、会場内に特別分別ゴミ箱を設け、スタッフを配置することにより、来場者に対し分別の案内を行っています。加えて、模擬店出店者にもゴミの分別を手伝ってもらうことにより、名大祭に関わる多くの方の、環境対策への意識の向上を図ります。詳しい分別項目やその他の取り組みについては、名大祭パンフレットでも紹介しておりますので、ぜひご覧下さい。

#### 問い合わせ

名大祭本部実行委員会

TEL:052-789-5178

E-mail:mail@meidaisai.com

URL:http://meidaisai.com

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**5月21日(水)、6月4日(水)、  
6月18日(水)**  
場 所：IB 電子情報館 2階 IB 大講義室  
時 間：18:30~20:00  
定 員：200名  
受 講 料：一般31,500円、  
NHK文化センター会員29,400円、  
高校生無料(全20回)

**大河講座「ひとの大学」 第一部・天の巻**

**われわれはどこから来たのか**

- 5/21 講演題目：「人間は宇宙をどのように知ってきたのか」  
講 演 者：戸田山和久(情報科学研究科教授)
- 6/4 講演題目：「地球の誕生」  
講 演 者：渡邊誠一郎(環境学研究所教授)
- 6/18 講演題目：「全地球史解説」  
講 演 者：熊沢峰夫(静岡大学客員教授)



[問い合わせ先]  
NHK 名古屋文化センター 052-952-7330

**5月24日(土)**  
場 所：シンポジオン  
時 間：13:30~18:00(予定)  
主 催：G-COE 化学

**博士とキャリアパス**

学位取得後の様々なキャリアパスを紹介し、会社で活躍する若手研究者の講演や、具体的な会社の求人情報なども紹介します。



[問い合わせ先]  
理学研究科物質理学専攻化学系  
阿波賀邦夫教授 052-789-2487

**5月28日(水)**  
場 所：博物館野外観察園  
時 間：13:00~15:00  
参加無料

**博物館野外観察園見学会**

案 内：西田佐知子(博物館助教)、野崎ますみ(博物館技術補佐員)



[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

**5月29日(木)、6月16日(月)**  
場 所：環境総合館 1階  
レクチャーホール  
時 間：18:00~19:30  
参加無料

**第39回、第40回防災アカデミー**

- 第39回(5/29)  
講演内容：「まちが崩壊する前に」  
講 演 者：柴田いづみ(滋賀県立大学教授)
- 第40回(6/16)  
講演内容：「原発と地震  
—新潟県中越地震と地震の教訓—」  
講 演 者：入倉孝次郎(愛知工業大学客員教授/  
京都大学名誉教授)



[問い合わせ先]  
災害対策室 052-788-6038  
taisaku@seis.nagoya-u.ac.jp  
http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/

**5月30日(金)~7月26日(土)**  
場 所：博物館展示室  
時 間：10:00~16:00  
休 館 日：日・月曜日  
入場無料

**第10回博物館特別展**

**「今に生きる、からくり人形  
～ものづくりの源流と尾張文化の継承～」**

※5月30日(金) 10:30~  
リニューアルオープンセレモニーを予定

- 6月7日(土)  
11:00~・14:00~ からくり人形実演
- 15:00~ 第82回博物館特別講演会  
講演題目：今に生きる、からくり人形  
講 演 者：末松良一  
(豊田工業高等専門学校長、名古屋大学名誉教授)



[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**5月30日(金)**

場 所：博物館展示室  
時 間：13:30～14:30  
入場無料

**第22回博物館コンサート (NUMCo)**

「雅楽 (三管：笙、箏、龍笛)」

演 目：未定

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**5月31日(土)～6月1日(日)**

場 所：博物館、岐阜県各務原市・  
愛知県犬山市の木曾川河原  
時 間：13:30～16:30 (5/31)、  
9:00～15:00 (6/1)  
定 員：30名  
対 象：小学3年生～中学3年生とその  
保護者 (中学生は個人参加可)  
参 加 費：500円  
※要事前申込

**第1回地球教室 (親子対象フィールドセミナー)**

「河原の石で包丁をつくろう」



[問い合わせ先]

博物館内地球教室事務局 052-789-5767  
earth@num.nagoya-u.ac.jp

**6月11日(水)～7月4日(金)**

毎週水・金 全8回  
場 所：文系総合館  
カンファレンスホール  
時 間：18:30～20:00  
対 象：一般社会人、大学生、大学院生

**国際言語文化研究科公開講座**

「メディアを読み解き、創造・発信する力」

内容については、以下の URL をご覧ください。

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/events/2008/kokaikoza-08.pdf>

[問い合わせ先]

文系教務課国際言語文化研究科担当  
052-789-5245 FAX：052-789-4921

**6月13日(金)**

場 所：野依記念学術交流館  
時 間：13:30～16:30  
定 員：200名

**第2回学術シンポジウム**

学術と「産学連携」

～産学連携とひとつづくり～

[問い合わせ先]

研究協力部社会連携課 052-789-5545

名大トピックス No.180 平成20年5月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail [kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp](mailto:kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp)

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

木曾川滑空場で行われた  
新入生向けグライダー  
体験搭乗 (航空部)  
(平成20年4月19日)



## 73 名古屋帝国大学の文学部設置構想

名古屋大学は、1939(昭和14)年に名古屋帝国大学(名帝大)として創立され、来年で70周年をむかえます。総合大学とはいえ、当初は医学部と理工学部(42年に理と工を分離)のみで、文系学部が設置されたのは戦後になってからでした。

名大に文学部が置かれたのは、1948(昭和23)年のことです。その前年には、すでに大学名も名古屋大学(旧制)となっていました。しかし、戦前の名帝大の時代から、文学部の創設は模索されていたのです。

初代医学部長で戦後には第二代総長となった田村春吉は、名古屋医科大学学長として、同大学を母体に帝国大学を創立する運動に大きな役割をはたした人物です。49年に総長在職のまま亡くなるまで、名帝大を真の総合大学とすることに情熱をかたむけました。

その田村は、初代総長の澁澤元治とともに、戦時体制という厳しい状況下にもかかわらず、文学部の設置に乗り出しました。当時の新聞によれば、澁澤総長は太平洋戦争開

戦まで間もない1941(昭和16)年7月頃、名帝大の評議会で翌年度の文学部創設を文部省に要請することを言明したとされます。財源には、地元の財界から講堂と図書館建設のために寄付される予定であった100万円を考えていたようです。しかし、この時代に文学部を新設することは至難の技であり、構想は実現しませんでした。

戦後、いよいよ名帝大にも文系学部を設置する気運が高まりましたが、その財源は相変わらずの難問でした。そこで田村総長は、GHQ(連合軍最高司令官総司令部)の国家神道排除政策によって廃止されようとしていた神宮皇學館大学(のちに私立皇學館大学として再興)を文学部の母体とすることを考えました。これは構想だけにとどまらず、皇學館側にもその意向が伝えられ、学生大会は満場一致でこれに賛意を表しました。

しかし、結局これも実現せず、文学部は母体となる学校のない新設学部として創立されることになったのです。

名帝大に文学部創設  
懇談会で 田村醫學部長示唆

三公顯彰

名大、皇學館を吸収  
法文学部として新發足か

愛知新聞



- 『新愛知』(現在の中日新聞)1941年7月3日の記事。
- 『毎日新聞(大阪)』1946年2月17日の記事。当時は、文学部と法学部を合わせた法文学部の設置が構想されていた。
- 文学部創立60周年記念式典(2007年11月3日)